
異世界で物書き

Ryuu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で物書き

【Nコード】

N9638X

【作者名】

Ryuu i

【あらすじ】

気が付いたら異世界でした。中世ヨーロッパ風で、どうやら剣は現役、魔法みたいなモノもありました。「ファンタジー万歳！」と三十路手前の男は喜びました。ですが、心は少年の様にはしゃいでも、肝心の体力がついて行きません。現代社会で仕事に追われ続けたその男は、泣く泣く冒険活劇に見切りを付けます。「それならば！」と、現代社会では叶えられなかった職業を目指し方向転換、異世界での夢は叶いませんでしたが、現代での夢を叶える為に、叶え続ける為に頑張ります。力はありません。魔法みたいなモノもある

んまり。けれど偶に、文化速度の差と、環境意識の差と、日本人的凝り方で、何かやらかすかもしれません。そんな一応、異世界日常系、それでは開幕の時間と相成りました。

1話 日常で到来（前書き）

初、小説です。稚拙ですが暇潰し程度になりましたら幸いです。

1話 日常で到来

「ふう……」

男が溜息を付く、先程から同じ事を繰り返している。
太陽は真上に昇ったのだろう、もう窓からは陽は見えない。

「参ったな、本当に参った」

こぼした言葉に何の意味も無いけれど、出さずにはおれない
そんな感じでまた、溜息を付く。

事の始まりは、彼の友人が言ったモノから動いた。

「ねえ先生、いい加減コレどうにかしてよ」

先生と言われた30過ぎの男は、そこで筆を止める。
男が目上げた先には、16歳くらいの金髪碧眼の小柄な少年が、
本の山を崩さぬようにこちらに近づいて来ていた。

「来ていたんですね、おはよう」

少年の髪と目の色は、この国では有り触れたモノであるがその造形が一線を画していた。

同性でも振り返り見てしまうであろう、均整の取れた理想的な配置に、

乙女達が夢見る『王子様』の見本が現実に出てきたのかと錯覚する程である。

「おはよう、じゃないよ。もうとくにソール様は真上に来てるって」

外の方を見ると、太陽はもう窓から見えなくなっていた。どうやら仕事に没頭し過ぎて時間の感覚が見えないようだ。

「もうそんな時間でしたか、なるほど、お腹が空く訳だ」

「また、徹夜したの先生!？」

「いえね、この切りの良い所まで書くうと思っていたら夜が明けてたんですよ」

「いい加減にしないと、死んじゃうよ！」

そう言いながら、少年が手持ちのバスケットから食べ物を取り出そうとして手を止める。

「ああ！この前片付けたのにもうテーブルが消えてる……」

「ちゃんとソコにありますよ？」

男が指さす場所にはいくつもの本の塔。辛うじてテーブルの木目が見え、これがテーブルだと解る。

「あーもー！これ全部撤去しちゃうから！」

「ああ！待ってください、まだ資料として使ってますからそのままのまま」

「ダメ！ご飯食べれなくなるから！」

ぶつぶつ言いながら、男を無視して本を移動する。

結局は別の山が成長しただけなのだが取り敢えず、である。

テーブルに置いたバスケットから、昼食用のサンドイッチを取り出し並べる。

男は机から腰を上げて背筋を伸ばすと、面白いくらいに音が鳴る。

自覚はなくとも身体は正直で、お腹も鳴り始めた。

少年がおかしげに笑いながら「ちゃんと体調管理はしないと」などと言われても当人はどこ吹く風で気にしていない。

「何時もはちゃんと食べてますよ。

偶に忘れるだけですって」

「怪しいなー、ほんとかなー」

「そんな事より、折角出してくれたんですから食べましょう食べましょう」

これ以上追求しても昼食が遅くなってしまうので、

少年も会話を一旦止めて水筒を取り出し、二人分用意する。

「なんとかしないといけないかな……」

呟く少年は正面を向き、気持ちを切り替える。

「恵みによる糧を口に出来る事、感謝致しますソール様」

子供っぽい所が抜けきらない歳の少年だが、祈る姿は堂に入っている。

そんな少年を微笑ましく思いながら、男も短く「いただきます」と食前の挨拶をして

サンドイッチに手を伸ばす。

食前の祈りさえ終わってしまえばいいのか、少年が会話の続きを切り出す。

「ね、先生。いい加減何とかしようよ」

「何をです？」

食事時の会話はマナー違反であるが、ここには二人しかいないのでお喋りが続く。お互い黙って食事をするより楽しいからだ。

「この本の山、これじゃ家を任せた意味ないよ」

「ふむ、しかし、私の仕事柄、こうなってしまうのは、必然でありまして、それになかなか忙しく…」

男が住んでいるこの家は、元々が少年の持ち家であり
現在は男が借りて住んでいる。持ち主に突っ込まれると、とても弱い。

「まあ、先生には新作早く出して欲しいし。
そこでね……」

なんだか、よくない流れを感じた男は生きる道を探すが
いたずらを思いついたかの様な、飛びっきりのイイ笑顔で少年が言
葉を続ける。

「掃除する『人間』が必要だよね！」

「ふう……」

何度思い返しても逃げ場はなかったのだと諦める。
そもそも男には選択肢はない。この家の所有者は彼の少年であり、
男が前の貸し家を追い出され途方に暮れていた時に「家の管理をす
るのなら」と
条件付きで、しかも格安にて空家を紹介してくれたのだ。

人が住まなくなれば、家の耐久年数は加速度的に短くなる。
しかし、男が仕事に精を出せば本の山が生まれ部屋が埋もれていく。
実際、家の管理どころか自分の健康管理すら放棄して、仕事に没頭
する始末である。

「住み込みつて所がな。一人の方が気楽なんだけど、
なんとかして、せめて通いにして貰うか…」

一人で生活していた時間が長かった為か、同居人が出来ると言う
事に

抵抗感が働く。つまりは、いい歳をして他人との近い付き合いが分
からないのだ。

今は没頭すべき原稿に筆を置き、男はある人物を迎える為
玄関のホールにいた。その背中ではもう既に煤けて見える。

「もうそろそろ時間でしょかね、確か到着の時間は」

そう呟いた時、玄関扉からノックの音が響いた。

「あ、はい、今開けますよ」

ノックに返事をしつつ、男が扉を開け放つ。

玄関先には女性が一人、ニコリともせず無表情で立っていた。

「本日からこちらでお世話になる、アイリと申します。以後よしな
に、
フミアキ様」

アイスブルーの双対の宝玉に、一瞬見蕩れるが慌てて意識を戻す。見蕩れたアイスブルーが、余りにこちらを冷たく射抜いてたからだ。

「こんにちわ、初めまして、この家の一応主？のフミアキと申します。

あ、主と言いましてもここ、借家ですからね、おまけに私、平民ですし

堅くならず、気軽にしてくださいー……」

あはははー…と乾いた笑いにも、やはりアイリは無表情だった。

完全に滑ったと凹みつつ、まだ挨拶だけの自分に活を入れる。

「それでは中へ、遠路遙々お疲れでしょうお茶でもお出しします」

「結構です、お茶などメイドである私の仕事です。キッチンの場所だけ

御教え願えますか」

ピシャリと言い放つアイリに、フミアキは気圧される。

「いきなり仕事もないんじゃない？今日は着いたばかりですし、一日ゆっくりしても」

「我が主より、「まずは掃除!」と言伝されております」

「はあ、そうですか…」

三度肩を落として、諦める。彼女は少年の刺客なのだ、ならばもう好きにさせるしかない。

項垂れながら、「案内します」と言うフミアキに、アイリは無言でついて行く。

館の中を順に案内していると、段々アイリの表情が険しくなっていく。

初めて感情らしきモノを見たな、と呑気な事を考えるフミアキだったが

最後に、自分の書斎を見せたらアイリに館から追い出された。

「よくわかりました、わかりましたので暫く外で待っていて下さい」

有無を言わせない迫力と、凍えるような双眸がフミアキを貫く。

どうやらアイリは、館の現状に大変ご立腹のようだ。今の彼女はこれから

戦場に向かうと言わんばかりの気迫を持って、立っていた。

(なにこれ、こわい)

ここに上下関係が、決定された瞬間だった。

1話 日常で到来（後書き）

ご意見、ご指摘ありましたらお願いします。

2話 猫で犬（前書き）

この作品には厨二的な表現が多分に含まれています。
アレルギーのある方は戻るボタンを押して戻ってください。

2話 猫で犬

魔窟掃討作戦（アイリ談）より、2週間が経った。

以前とは見違える程の書斎にて、以前と変わらず執筆中のフミアキ。床に直積みの本達は、新たに作られた壁の本棚に綺麗に整頓されている。

「金持ちって怖いなあ」

そう呟くフミアキだったが、館からフミアキが追い出されてからアイリは家具職人を呼び出し、書斎の壁に本棚を作らせ本の山を処理した。

出来上が立った本棚は、上質な木材と丁寧で繊細な細工まで彫られており

職人の腕の良さを窺わせる一品と仕上がった。

一目見て一流の仕事と判断出来る本棚の出来に、フミアキは歓喜したが

瞬時に自身の経済状況、即ち財布の中身を思い出す。

怖くなって小声でアイリに聞くと、「全て、我が主の計らいです」と言われた。

「この家も随分綺麗になったし」

館の掃除に掛り切りになる事5日、館の設備に屋根の修繕に7日ちよっとしたリフォームが終わったのは先日である。

よくここまで手を付けずに過ごしましたね、とアイリからお叱りを受ける羽目になった。

「悪い人ではないのは分かるんですが、怖いんですねえ」

初日のインパクトに、館の管理不足からくる罪悪感
ましてや、あの少年の紹介なのだ、逆立ちしても頭が上がらないし
アイリの給金に関しても少年持ちである。

「あの子にお世話になりすぎて、返せる恩の宛がない」

こここの所の急激な環境の変化と、少年への積もった大恩に筆が止
まり思考が飛ぶ。

気が付けばアイリが隣に来て、お茶を注いでいた。

「あの、アイリさん、何時の間に、こちらに？」

「ノックをしても返事がなかったので、勝手に入らせて頂きました」

と、しれつと答える。

気配もなければ、優雅に注ぐ所作にも音がない。
ふわりと紅茶の香りが鼻をくすぐり、匂いだけでも上質な茶葉であ
る事が窺える。

「ありがとうございます、この家にはお茶っ葉はなかったと思いますが、どうしたんですか？」

「買って参りました」

「はあ、しかし、随分高そうですね」

「我が主より、お世話に当たり抜かりない様、仰せつかっております」

「お、大袈裟ですね」

紅茶を啜ると、会話が途絶える。
どうにも会話が續かない、他所のメイドさんとやらもこんな感じなのだろうかと思うも
怖くて聞けないフミアキだった。

窓から流れる初夏の風に、紅茶の湯気が揺れる。
暫く無言で紅茶を堪能するフミアキに、珍しくアイリが話を切り出す。

「…フミアキ様は、我が主とはどういったご関係でしょうか」

「あれ、何も聞いていませんか？」

「主より、執筆に滞りなき様、便宜を図ってほしいとの事でした
推測は立ちますが、貴方様の口よりお聞きしたい」

「そうですね…、読者であり、友人であり、そして——命の恩人と
言った所でしょうか」

この言葉に、アイリはじっと目を細めるもどこか得心がいった顔
をした。

少年と知り合う切欠となった出来事は、フミアキの名を良くも悪く
も広める結果になったので

彼に近い人物なら、今の説明で事足りるだろう。

「彼に仕える貴女からすれば、私なんぞには関わり合いを持って欲
しくない、

そう思うのはしょうがない事だとは思いますがよ」

——すみません。と、どこか自虐的な笑みを浮かべる。

「確かに関わってほしくありませんが、個人としましては——」

ボタン！と唐突に書斎の扉が開け放たれる。二人の視線が扉の先に注がれる。

「すごい！あの部屋が綺麗になってるー！」

興奮気味に感想を口にする少年、あの本の山を見ている者からすれば

現在の書斎は別モノだろう、口を酸っぱくして注意してた少年からすれば一塩かもしれない。

「アイリ、よくやった！」

「はっ、恐悦至極に存じます」

「ふっふっふ、僕の見立てに間違いはなかった、やっぱりアイリを送り込んだのは正解だったね！」

「…送り込まれた方は、大変でしたよ」

「何言ってるの、先生がちゃんとしなからだよ！」

ぼそりと呟いた言葉を聞き逃さず、直ぐ様フミアキの文句を両断する。

怒った様に言う姿は、年齢よりも幼く見えて愛らしいと思う他ない。

「もしイヤだったら、これからはきちんと整理整頓！」

「そうですね、これだけ綺麗にして貰ったので、汚すのに抵抗が出る様になりました」

——うんうん、そうでしょそうでしょ。と得意気に頷く少年を見るフミアキだったが、

ここから逆襲が始まる。最近押され気味なのだ、少しくらい仕返しをいや、2週間お世話になったお返しをあげなくては。思いながら、唇が僅かに上がる。

「ええ、そうですね、これからは掃除にもっと力を入れるとしますただ、掃除に専念しすぎて新作が遅れるかもしれませんが、そこは容赦してくださいね」

その言葉を受けて、一瞬にして固まる少年。先程まで絶頂にいただけにあって

今の奈落に落とすに十分であった。言い返したいけれど言い返せない、少年に取っては

死刑宣告に等しい。無言のまま、その内、目尻に涙が溜まっていく。

このやり取り自体、二人に取っては何時もの事である。

少年がフミアキに説教をする、フミアキが反撃する、少年がやり込められると泣きが入る、

フミアキが土下座する。が一連の流れになる。

今回は連敗が祟ったせいか、伝家の宝刀まで抜いてしまったのだ彼の機嫌を治すには、どれだけの土下座がかかるか少し後悔が入るも目まぐるしく表情の変わる少年を見ていると、またやってしまうのが困りものである。

そんな何時ものやり取りであるが、フミアキは重大な事を失念していた。

ここには二人だけではない事を、そして彼の少年を主と仰ぎ、忠誠心厚きメイドがいる事を。

少年いじりを堪能しつつ、そろそろ土下座と謝罪の体勢に入ろうとした矢先

フミアキの足が止まる、止められる。足の踝まで『氷』が張っている。

「我が主の涙、貴方様の命より安いと思わない事です」

普段の澄んだアイズブルーの瞳が色濃く染まる、彼女の手は空中

に踊り方陣を描き

空陣からは漏れる燐光は、
 籠めたる力の大きさを物語る。

——あ、死んだ。直感で判断すると、アイリに向けてた視線を少
年に戻す。

命を握るアイリから目を反らすのは完全なる自殺行為であるが、少年に伝えるべき言葉を残す。

「クーエンフルダ、貴方は私の一番の読者であり、大切な理解者でした。」

心残りには、受けた恩を返せなかった事謝ります」

「なんで過去形、先生死んじゃうの?!」

「いや、これ、もう、積んでるでしょ。腰まで凍ってきてますよ。形ある紋言」を使わずに、コレですか」

——すごいですね。などと呑気に話してるが、心臓まで達したら本当に生命活動に支障が出る。

「ちよつと、ちよつと！アイリ止めて――――――――――！！！」

「クーエンフルダ様を泣かせるとは、極刑モノです。省略して私が執行します」

「僕、泣いてないよ?!それよりこれだけで先生死んじゃうの?!」

「あ、この状況、このアイデア、次回のネタに使えるか?」

「ちょッ!?先生もうちょっとで本当に拙いんだよ!?危機感持ってよ!」

「もう、最後の言葉も伝えましたし、いいかなあーとか…後、大分感覚なくなってきました」

「いいかなー、じゃなーーーーーい!」

「さてと、時間と相成りました」

胸まで氷が達し、フミアキの首がカクんと落ちる。それまで真っ赤になっていた

クーエンフルダの表情が入れ替わる、人形の様な感情の持たない人型がそこにいた。

「アイリーン、本気か？」

「どんな処罰も覚悟しております、ですが、この男の存在はひ…」

言い終わる前に口が止められる、部屋には無数の方陣が舞う事に寄って。

鉄火場に置いても途切れる事のないハズの鋼鉄の意思が、部屋を覆い尽くす力に

当てられ途切れそうになる。

無言のまま、クーエンフルダは描いた方陣に力を更に注ぐとフミアキにまわりつく氷が砕けていく。

しかし、フミアキの意識はまだ、戻らない。

息を深く吸う、クーエンフルダのエバーグリーンの瞳がブラッドレッドに染まる。

「黄神、最神、天命神、逆風吹きて誰彼の、夕星、入星、宵闇星、迷い彷徨い宵の口

帰れぬ黄泉道に不憫ぞ一縷、古鐘、神鐘、魂釣鐘、御神のみてぐら落下傘、空瑠璃空瑠璃鳴り響け」

クーエンフルダの口から、『形ある紋言』が紡がれる。

「——『ゴートベールドの福音』」

部屋に散らばる方陣から、光の奔流が解き放たれる。

同時に部屋いっぱい音が満ちる。低く、高く、激しく、静かに、全ての『光』と『音』がフミアキに降り注ぐ。

しかし、まだ目を覚まさない。顔色は元に戻っているが、意識がないようだ。

クーエンフルダは、更に力を籠める。絶対に助けるのだと言いたげに。

見守っていたアイリがここで溜息混じりに動く。

「失礼」

短く言い切ると、フミアキの上体を起こし、『当て身』を食らわせる。

「アイリーン、まだ……」

——何かするつもりか。と、問う前に、フミアキが小さな呻きを上げた。

そこでようやく方陣の稼働が止まる。長い息を吐き、安堵の思いが胸を満たす。

安堵と一緒に「何故？」と言う疑問が湧き上る。あの方陣は、クーエンフルダが持つ

最高の治癒陣であり、その効果は自身が使い数多くの人間を救ってきた事で、証明されている。

「アイリーン、何故私の治癒陣が効かなかった」

答え難そうにするも、主人の目が答えを促す様にこちらを見据える。

「はっ、偏に……過剰でございます」

「は？」

若干間の抜けた声が出る。それでも、アイリは説明を続ける。

曰く、最上級の治癒陣が必要な状態ではなかった

曰く、氷は表面に張っただけで単に気絶、殴れば起きる

曰く、過剰な治癒陣で逆にフミアキの命が危なかった、等々

アイリの話が続くにつれて、どんどんクーエンフルダの顔が赤くなっていく。

「きゃーーーーー！！！！それ以上言わないでええええー

ーーーー！！！！」

「前から思っておりましたが、少々方陣に頼り気味かと存じます」

要は、焦ったクーエンフルダが混乱して状況を把握、確認せずに感情のまま力を奮って、墓穴を掘った。そんな公式がクーエンフルダの頭に浮かんだ。
恥である。

「うう…つつつ、なんだこれ、気持ち、悪い…っえ」

やっとのように意識が覚醒するも、頻りに頭を振っているフミアキ。

意識が飛んでいた為、部屋を見渡す。

頭を抱えて座り込むクーエンフルダと、何時も通り背筋を伸ばして立っているアイリ。

「あの、えーっと…、何が起こったんですか？」

「あー！！先生無事だったんだね！！」

——よかった！と言いつつクーエンフルダがフミアキに駆け寄ってきた。

そして、アイリと一緒に氷からの経緯を、軽く話して謝罪する二人。心底申し訳なさそうに謝る少年と、何時もの無表情で謝罪を口にするメイドさん

その対比に少し笑ってしまふフミアキだった。

「アイリ！もうちょっと真面目に謝ってよー！！」

「いや、いいんですよ、クー」

「よかないよ、本当に危なかったんだよ！…主に、僕のセイなんだけど…うう」

「私を助けようとしての行動だったんですから、そんなに気に病まないでください」

少年をやんわり慰めるフミアキの顔には、殺されかけたハズなのに負の感情が欠片も感じられない。作り笑いでも、感情を押し殺す様にも伺えず

そんなフミアキを見るアイリは、その目をじっと細める。

アイリの視線に気づいてか、フミアキがアイリの弁護をする。

「あの出来事から、今でも教導院に睨まれていますからね、いくら貴族の君とは言え立場を悪くする、アイリさんの心配は最もですよ」

「またそうやって他人の心配するッ、先生は、もっと自分を労わるべきだよー！」

「そうですね、次からはもっと気を付けるとします」

はぐらかす様に答えるフミアキに、反駁し口を開も直ぐ様閉じられる。

何故なら、フミアキの顔色は青を通り越して白くなっていたからだ。健常な人間に最大の最高の治癒陣でもって、クーエンフルダの常人より

遥かに強い力が遠慮なく注がれた為、福音の力がフミアキの身体の中行き場をなくし暴れてるのだ。

「先生！本当に大丈夫なの？！」

「不味いですね、急いで処置を——…」

二人の遣り取りを聴きながら、フミアキは前のめりで倒れる。

今度は、自らの意思で意識を手放す。実を言くとフミアキは限界でいっぱいだったのだ。

2話 猫で犬（後書き）

1週間に1話を目処に頑張ってみます。
ご意見感想お待ちしております。

3話 昼で夜

一日の内に二度死にかけた事件から三日目、フミアキはまだベットの住人でいた。クーエンフルダの力が強かったのか、それともフミアキの体力が貧弱だったのか、一日目は起き上がる事すら出来なかったのだ。

「あれはアイリさんに、上手く嵌められたかな
いや、試された…そんな感じが」

ある人物の真意を忖度するに、怒らせるか死に際まで追い込む、本音を零さずには居られない状況を作る。主人にとってフミアキと言う人間は、信用するに足る人物か否か。フミアキにとって、前回の遣り取りは試され様な印象を受けた。

「にしては…、些か乱暴だった様な、
時間を掛けるゆとりがなかった？性急に確かめたかった？
案外、大雑把な性格だった？クー以外はどうでも？
あ、これが一番しっくりき……」

「随分な仰り様ですね」

「ヒッ！」

何時もの如く、いつの間にかアイリが紅茶を煎れている。
もちろん無音で。フミアキの心臓は、事、アイリに関して最弱である、

トラウマに昇華されたのかもしれない。

「サイレント・ティーは止めてくださいよ……」

「変な固有名詞を付けないで下さい、それとノックは致しました」

今日も無表情が固定のアイリに、腰が引ける、ベットの上だが。
ありがたく、と紅茶を貰うフミアキにアイリが続ける。

「楽しそうな話でしたの、声を掛けそびれました」

まずい、と言う顔をしフミアキは露骨な話題転換を図る。

「そう言えば、茶樹の中には態と葉に付く害虫を駆除せず、
放置する育成方法があるらしいんですよ」

「……」

「…これはですね、害虫に葉を噛まれた茶樹が再生の為に変色するんですよ」

「…」

「…実はこれ、変色ではなくて発酵してるんですよ、茶樹が本来持つ香りは、害虫と茶樹が持つ再生能力で、特有の匂いに変化、する、それを収穫、製茶する、そうですよ」

「…」

「…ははは、でも、茶樹自身は、治そうとしたら、今度は、摘まれて踏んだり、蹴ったり、じゃないですか？」

「そうですか」

もう無理だ…、と、顔で喋って口は無言のフミアキ。
三日前の出来事が鮮明に脳裏を過ぎる、
もう、遺書くらい作って置いた方がいいのかもしれない。

「そうですか、では…——」

パターン！と扉の開けられた音にてアイリの言葉が遮られる。
「フミアキさん！倒れたってどう言う事ですかぁー！ー！ー！」
「原稿の締切がもうすぐ…、って、フミアキさんが居ない！？」
「そんな、椅子から生えてる新種の自生植物だったんじゃない？！」
「あ！足でも生えて移動出来る様になったとか、新種恐るべし」
「そんな事より、原稿！ー！ー！ー！どうしようどうしよう」と、書斎の方から聞こえてきた。

「……」

「……」

「…アイリさん、連れてきて貰っていいですか」

分かりましたと、小さく綺麗なお辞儀をして書斎に向かうアイリに、

フミアキは小さく安堵した。

「もー、そう言う事は早く言ってくださいよー」

そつぷりぷりしながら話すと、女性はハニーブロンドの肩口で切り揃えた髪を

揺らしながら、フミアキに抗議してきた。

「ラミアさん、そんな事言いましてもね、こちらも立て込んでたからしょうがないでしょうに」

「だーからー、なんで少し間空けたら、家は綺麗になってるわ、メイドはいるわ、原稿は出来てないわ、一番なのは椅子から移動してる事、驚かせすぎですよー！」

「貴女もう19でしょう、もうちょっと落ち着いたらどうなんですかそれと、一番驚いたのがソレってドウなんですかね」

「十分落ち着いてますー、弟から「姉さんは発育だけはいいいよな」って言われるんですからー」

「ソレ、嫌味じゃ…」

「えっ？大人って事でしょー？」

アイリやフミアキよりも、高い位置にある頭を少し傾げてラミアが答えた。

女性にしては珍しい高身長を持つ彼女の、一番のコンプレックスの話に発展する前に

フミアキが話題を変える、その身長から繰り出される攻撃に、今は耐えられないと踏んだからである。

「取り敢えず、こんな状態なので原稿はもうちょっと待って下さい」

「後4日は待ちますから、大丈夫ですよー」

「4日って…、全然締切延びてないじゃないですか」

「だって、ここの所反響は良くなって売上げ伸びたんです。所長から「そろそろ気が緩むからな、

絶対アイツの原稿を持ってコイ」って指ボキボキ鳴らしながら言われたらー…」

居るはずのない所長の姿が見えるのか、首をぶんぶん振って青醒めるラミアに

少し同情するも、命がかかるのはフミアキも同じである。

「私の命も、もって4日ですか。なかなか悪くない人生でしたね」

ベットから遠くを見つめながら、刻一刻と薄くなるフミアキを必死に押し留める、

原稿が書けなければ制裁を受けるのはフミアキだが、もちろん原稿

を持ってこれなければ
ラミアも説教を受けるのは確実である、わりかしマジに気絶するらしい。

「フミアキさん?! 逝かないでー!! 原稿、せめて原稿書いてから逝ってー! ! ! ! !」

—— ちょ、首が首が絞まつ。焦ったラミアに襲われ、無自覚なままに絞め落とされた。
きっかり10分後に目覚めたフミアキが、「実はほぼ原稿は出来るんですよ」。と明かすと

「どーして意地悪するんですかー! ! !」と、拳が飛んできて意識も一緒に飛んでしまった。

「やれやれ、酷い目にあつた」

少し開け放った窓から夜の風が吹いてくる、初夏も過ぎたがまだ夏の暑さを感じない。

昼の出来事にボヤきつつ、手元には原稿を置いて推敲する。

「これで三冊目、本当にここまで出せるとはなあ…」

感慨深げに息が漏れる。何時もの困った様な溜息ではなく
しみじみと噛み締めた口から。

「こちらに来てからもう三年か、思えば遠くに来たもんだ…」

部屋は暗く、手元を照らすだけの小さなランプの火が、ジジツ…
と燃える。

「私はね、今の生活にとっても満足してるんですよ。
ですから、そんな怖い顔しないでください」

口調を変え、部屋の隅のくらがかりに向けて言い放つ。
フミアキにしては、割と真面目な声を出す。

「…」

すうーっとアイリの姿が薄暗闇に浮かび上がる。

「びつくりしました？ いや、何時も驚かされてばかりですからね
でも、表情変わりませんね。疲れませんか？」

「冗談めかして喋るフミアキに向かって、アイリの威圧が増す。

「おう、そんなに睨まないでくださいよ。ちょっと場を和ましたかっただけなんですけどね」

自分で空気を作って、自ら壊しては世話のない話だがもう一度、真面目な顔を作りアイリに向かい合う。

「何を言ったら貴女は納得してくれるんでしょうね。

先程も言いましたが、私は現状に何ら不満はありません。ですから、これ以上望むモノは無いんですよ」

「貴方様が宜しくても、『教導院』はそう思わないでしょう。違いますか」

『教導院』それはこの国に住んでるなら無縁では居れない。

太陽神ソールを唯一神と崇め、国のみならず世界宗教と言っている規模を持つ。

「『教導院』ですか、あの時は本気で死を覚悟しましたね」

まるで良き過去を懐かしむ様に話すフミアキに、アイリの眉が僅

かに動く。

「私が『氷』を撃った時も、貴方様は死を覚悟する様な言葉を口にしました。」

アレは分かっている巫山戯たのですか」

「死ぬかもしれないと思ったのは正真です。
真面目な遺言ですよ」

「貴方様は異常です」

ケロッと答えるフミアキに、短く言い切る。

あの時、手加減して殺さぬようにアイリが放った、形としての死に
対して

淡々と遺言を述べるフミアキのその姿は、理解出来ぬモノであった。
ましてや、どれもこれも死を前にして言うには客観過ぎる。

「いやはや、手厳しいですね」

「我が主に、少しでも悪害になると判断した時
今の様に、覚悟を決めておかれるといいでしょう」

——御心が鈍らぬ様に。と、言いつつ退室していった。

「誰も彼も、死を忌避し過ぎている。
そんなに怖いモノじゃないのにな」

零すフミアキの言葉は、今度こそ誰にも受け取られる事なく
薄暗がりに消えていった。

3話 昼で夜（後書き）

お気に入りだが、3件も入ってテン↓ション→上がって←来ました。
有難う御座います。有難う御座います。

4話 本でアイス（前書き）

クー、暴走のまっき。

4話 本でアイス

カリカリと筆を走らせる音が、書斎にあるだけの時間。

外では太陽が暑さを主張している。どうやら盛りの本番がやってきたようだ。

フミアキは気付かない程集中して、執筆作業に没頭している。

「うーん、やっぱりもうちょっと質のいい紙使いたいな」

独りぼやくも、普段フミアキが使っている紙は、等質の一番下の紙であるから仕方がない。

混ざり物の少ない上質な紙はお高いのだ。

「中世ヨーロッパ風って思っても、中世風ってだけで文化レベルがまちまちで

現代に匹敵する技術もあれば、さっぱり発展する気配のない技術もあるし

やっぱり不思議技術の方陣があるからなのか」

「印刷技術が方陣で賄われてるのは、本当に驚いたしそりゃ科学が発展しないわ」

「科学が根底に発展した世界と、方陣が根底に発展した世界。

明らかに後者の方が取れる手段が多い分、世界としてポテンシャル

は高い訳だが、

如何せん、両雄並び立たないのかね。かたっぽしか成長していない」

「それともあつちの世界でも、もしかしたら魔法みたいな不思議パワーが

過去存在したのかも？けれど淘汰されて科学が残った？『世界』は常に一を望む？

唯一神信仰もその表れ？」

「船頭多くして船山登っても、山に登れる技術力を持つ船頭が居れば

いくら船頭が居てもいい気がするけど。いつそ、海を進む技術力を持つ船頭と

山に登れる技術力を持つ船頭が、タッグを組んで弟子教育に励めば、宇宙に登れる船頭が出来上がるかもしれないな。む、両雄並び立たないか？

結局元に戻った。和を似て貴しと為し、忤ふる事を無きを宗と為せ。実に含蓄深い言葉だな」

妄想炸裂して苦笑している様は、本当に余人を遠ざける。

この時ばかりは、アイリも危険を察してか近寄らなかったとか。

だがしかし、ここに、空気も、妄想も、書斎の扉さえもブツ切り、

クーエンフルダが力の限り飛び込んできた。

「先生エエエエエエ！！ 新刊 買ったよオオオオオオオオオオッ！！！」

頬は紅潮しており、背中まで垂らした癖つけのある金髪は飛び跳ね、

エバーグリーンの瞳は感情の高ぶりを抑えきれずに潤んでいる。

「『不機嫌な勇者』第3巻読んだよッ！すごいね！面白いね！楽しかったよッ！」

高く掲げた手には、フミアキの著書『不機嫌な勇者』第3巻（最新刊）が高々と掲げられ、

「王都を出発してから、最初の街でいきなり領主を吊るし上げなんて！

その理由だって、街中で偶然出会った孤児院の女の子が、お腹を空かした勇者に

自分のパンを上げちゃってさ！女の子も空腹だったのに

勇者のあまりの飢餓っぷりにほっとけなくなったとか、優しい女の子だし！

でも、その女の子の住む孤児院が、悪徳領主に狙われてて危ない！」

余りに嬉しいのか本の内容を興奮しながら語りはじめ、

「そこは勇者だね！悪徳領主の乱暴な部下をコテンパにした後に！
「嬢ちゃん、パンあんがとよ。おかげで力が湧いてくるぜ。まあ、
あいつらの事は

この兄ちゃんに任せときな」って颯爽と去る勇者！！

もう次の行動は決まってるよね！1巻の時に王様に楯突いたくらい
捻くれてるのに

女の子の純粋な気持ちに弱いなんてさ！ずるいよー！」

フミアキは、突然の事態に呆然とし、

「そのまま悪徳領主を懲らしめるかと思ったらさ、なんでか歓談し
始めるし！

もー！悪徳領主に対して、なんでそんなに下手に出るのって思った
よ！

普段は肩書きとか嫌つくせに、悪徳領主には勇者だって名乗って取
り入ろうとして

悪巧みに乗っかり始めた時は、不安になっちゃったけどさ！

まさかそれが勇者の作戦だったなんてー！そんなの普通思わないじ
やない！」

尚もまくしたてるクーエ、

「勇者の策略に嵌った時は、拍手大喝采！泣きながら悪徳領主が
「た、頼む！金ならいくらでも払う、だからっ！」って往生際、本

当に悪いよねー！

それに「わりーな、お前の払う金よりも、もっと価値のあるモノ貰っちゃったからよ」って！

全然悪いなんて思っていないだろうにね！その後が！

「そ、それは一体！？」って縋る悪徳領主にキツパリ言い放つんだよね！

「堅いパンのひと切れさ」って！！かつこいいーーーー！！！」

何時まで続くんだこ、

「悪徳領主を吊るし上げたら、次が怒涛の展開を予想させる流れになるし！

等々、魔王軍の四天王の二人目が勇者の目の前に現れて、あれって……」

延々と続きそうなクーエンフルダの感想文に、フミアキが机の上の手頃な本を取る。

幸い、こう言う状態の対処法は前回経験済みなので、その手順を思い出し

掴んだ本を投擲する！

「きゃんッ！」

可愛らしい悲鳴と共に崩れ落ちるクーエンフルダ。

フミアキが放った本はアーチを描ききる前に、クーエンフルダの

額に当たった。

何食わぬ顔で近づき介抱すると「うう…いたたた…」と意識を覚ます。

おデコが赤いのはチャームポイントとして数えられるだろう。

「大丈夫ですか？床にあった本にけつまづいて頭を打つなんて、そっかしいですね」

「あ、え？。うー、あいたた、あれ…、そうなんだ…？」

きっぱりスッパリ言い切るフミアキに、若干混乱気味に呟くもまだ意識がハッキリしない、そんな彼を押し切る事にしたようだ。

「頭を打ったんですから、少し座って紅茶でも…。ん、紅茶?!」

拙い！と、冷や汗が流れるも気持ちを切り替える。だが、顔を上げるとそこには…。

「我が主に危害を加えるとは、よろしいですね」

なにがどうなってよろしくされるのか分からないが、フミアキは

腹を括る他なかった。

「生きてるって素晴らしい」

「今回は時間がかかって、もうダメかと思ったよ……」

なんとか一命を取り留めて復活したフミアキに、心配そうに寄り添う。

「アイリさんの力加減は絶妙ですね。こう、一歩手前どころか半歩手前まで持ってかれますからね」

「褒めちゃダメでしょ、まったく先生は……。何かの拍子に、コロっと逝っちゃいそうで本当に怖いんだからね」

げに恐ろしきはアイリの匙加減である。

「まあ、遺書は用意してあるので、問題はないんですけどね」

「この前言つてたのは本気だったの！？いや、問題あり過ぎでしょう！！」

「因みに、遺書には結構恥ずかしい事書いてあったりしますから、覗き見ちゃ駄目ですよ？」

「そんな事告白されても見ないから！そもそも先生は自分を労わないのがいけないよ！ほっとけば本に埋もれてるし、食事を忘れて仕事するしあつさり命手放そうとするから！」

52

普段から貯めていた文句がフミアキに襲い掛かる。

心配しての事だけに、この手の話をクーエンフルダに出されると弱ってしまう。

それでも、隠す様にこの遣り取りを誤魔化す。

「聞いている！？そもそも普段の生活からしつかりしないといい仕事も出来ないんだからね！」

この前アイリの報告を聞いて吃驚したよ！

確かに早く次回作を出して欲しいって思うけど、身体を壊しちゃ意味ないんだからね！

ちよつと先生、解つてゐるの?！」

「聞いてますよ。でもこつとも暑いと集中力が続きませんね。腰を据えて話を聞きますから、こつらで休憩にしましょう。アイリさんの『氷』で、面白い事を思い出して試したモノがあるんですよ」

「むー…、話しの続きは必ず聞いて貰うよ」

——それで面白いつて? 基本的に素直な少年は、フミアキの提案に不満げながら首を縦に振る。

「ああ、それは地下室に行つてのお楽しみです。アイリさん、その地下室の鍵を取つて貰つていいですか」

壁に掛かつた鍵の一群を指して、椅子から立ち上がる。そこでふと違和感を感じる。アイリが鍵掛けを見て動かないのだ。

「…」

「…」

「あの、アイリさん？」

初日に各部屋の鍵の説明はしたはずなんだが。と傾げる。
表情にこそ出てはいないが困惑している様子に、彼女の主人が口を挟む。

「先生、鍵の位置ずらしちゃったんじゃないの？」

「定位置は変えてないですよ、番号を振ってないから混ぜると、私でも偶にごっちゃになりますからね」

「ほ、ほら！まだアイリはこの日が浅いから、こう言う所で先生が気を利かせてあげないと！」

何処か腑に落ちない面持ちを残しながら、フミアキが地下室の鍵を手に取り
二人を案内する為に先導する。

「ここって、先生があんまり入らないで。って言った所だったかな」

「ええ、中には危ない物もありますからね」

「危ないって、一体何が入ってるの？」

「いろいろですよ、気分転換にとか手慰みで作った物をつと」

そう言って鍵を差し込み扉を開ける。地下室特有の湿った風を受
けながら

扉が重々しく開かれた。

「うわッ…。これは」

「……」

先程の事があってなのか、アイリは目で刺し殺してくるだけ。

少年は口を開けたまま動きが止まった。つまりは、惨状、ただその
言葉だけが

相応しい部屋だった。

「確かこっちの方に――…」

あれどこだったっかな。などとぼやきつつ部屋を漁る。

物がなければ、人が30人は入れそうな大きな部屋であろう場所。
だがしかし、所狭しと置かれた謎の物体に占拠されてしまっている。
ここを見た後だったら、書斎の本の山が可愛く見える。そう思わせ

る程である。

「……ねえ、先生。聞いていい？」

本来ならアイリが詰問したくらいだが、未だに沈黙を保っているので

クーエンフルダが代わりに問いかける。

「おつかしいな、どうしました、クー？」

「コレナニ？」

「ですから、私の作品達ですね。気晴らしに創作したり、分解したり。

あ、そうでしたそうでした。昨日完成したから、冷凍室に入れてたんです」

——いやー、歳はとりたくはないものですね。からからと笑うファミアキに

クーエンフルダは大きく息を吸い、大咆哮の構えに入った。

「——ッ！？けっふけっふっけ…ヶほッ！」

「クーエンフルダ様!？」

いきなりむせた主をアイリが心配する。先ほどまでフミアキが探し物をしていた為、部屋には埃が舞っていた。その中で深呼吸すれば、自然な帰結だろう。

「何やってるんですか、こんな所で深呼吸して。目的の物は上にありますから、さっさと出ましょう。とっと出ましょう」

危険を察知して、むせる彼を押し出して部屋を出る。

ここは、男フミアキ最後の砦。一ヶ所くらい雑多な部屋があってもいいじゃないかと、思いながら地下室を後にする。

「けほッ、酷い目にあつたよ…はぁ」

アイリから水を貰い溜息を付く。そんな少年を尻目に、フミアキは一抱えもある樽を持ち出してきた。樽からは冷気が漏れてる事から、冷たいナニが入っていると推測出来る。

「先生、一体ソレ何なの？シャルルとか？」

クーエンフルダの言うシャルルとは、この国の夏場に愛食される果物の氷菓の事である。手軽に涼を楽しめる為、この国の住人なら誰もが口にした事がある定番品でもある。

「ふっふっふ、そんな単純な物ではありません！私が試作を重ね苦労を積み、そして完成に漕ぎ着けた、血と涙と汗の結晶です！」

何時になくテンションの上がったフミアキの返答から、

恐らく食べ物関係だろうと思わせるが、彼は「あの部屋で作られたの…？」

「仰り様は大層ですが、血と涙と汗…口にして大丈夫でしょうか」と、アイリ。

二人して引いていた。

「まあまあ、怪しい物は入ってないんですがね…。ほら、こう言う食べ物ですよ」

厨房のテーブルの上に取り出された小皿に、樽の中の筒から取り出した白い塊を盛る。

未だに警戒の色を隠さない二人に説明をする。外に出したからには早めに食べないと勿体ない。

「これはですね、牛乳と生クリームと卵と砂糖を混ぜて冷やした食べ物…」

その名を『アイスクリーム』です！」

「うわー、薬膳料理だったんだね。でも、牛乳…」

「クーエンフルダ様、牛乳は身体に良い薬効があると聞き及びます。」

やはり偶の少量くらいは、御飲なさった方がよろしいかと」

「何故に薬膳。いいですか、これは冷たくてあまーい至高の嗜好品と言っていていいでしょう！」

「うーん、先にアイリ食べていいよ？」

「エエイ！つべこべ、言う、なし、食べ！味わい！虜なる！」

いい加減溶けそうになってるアイスクリームを掬って
クーエンフルダの口の中に押し込む。何故かカタコトで。

「むぐッ！ふつく……………む、ぐむぐ……………！？」

「ご無事ですか！？クーエンフルダ様っ、おのれ
やはり貴様は危険だ、ここで処分す」

「……………美味しい！！」

「クーエンフルダ様？」

「ふっふっふ、そうですねっそうですねっアイリさんも食べてみて
ください」

「アイリ、これすっごい美味しいよ！こんなに美味しい物食べた事
ない！

うわー！あまーい！冷たーい！あまーい！

「……………そう言われるのでしたら」

目をきらきらさせて感動している彼に、警戒心を鎮めてスプーンを取り掬う。
クーエンフルダはパクパク食べてる。必死に食べてる姿は小動物の如きで、頬を緩ませる。
が、その隣で得意げな顔をしてるフミアキが、鬱陶しい事この上ない。

「これは…、不思議な食感ですね。口溶けが滑らかでシャルルの様な水っぽさがない分、
より甘さを堪能出来き味わい深い…。生菓がこれ程とは、確かにこれは美味です」

「思わないよね！苦くて臭くて美味しくない牛乳が、こんなに美味しくなるなんてさ！」

「氷を分けて欲しいと言われた時は、如何なる意図か計りかねましたが、
感心致しました。」

「アイスクリームもそうでしたが、本のアイデアも頂きましたし、
こちらが感謝しなければいけませんね」

「あいであ？本の事とは一体」

「あー、アレやっぱりアイリだったんだね。羨ましかったな」

アイスクリームをパクつきながら喋る。横でピシリと固まる音が、露骨に拙いと顔を顰めるフミアキを、じろりと観察して少年に向き直る。

「クーエンフルダ様、どう言った事でしょうか。お聞かせ願いたいです」

「アイリ、先生の本読んでない？魔王軍『四天王』の二人目が出てきたんだけど

それがアイリにそっくりなの！灰青色の髪に氷の瞳、本だとすごい……、刺激的な衣装をって書いてあったよ。…男の人悩殺とか」

首をぶんぶん振って厨房の隅に逃げるも、アイリの歩みは緩慢だった。

俊敏に動かれるより、鈍い動作で近づかれる方がよっぽど怖いのだけれども。

「落ち着いて。確かに、無断でキャラのモチーフにしたのは謝りますが、

そう、このアイスクリームに免じてどうか、許して貰えませんか」

問いかけるフミアキに、アイリの肩で切り揃えられたグラッシュブルーを揺らし
アイスブルーの瞳が色濃く染まる。つまり、許す気はさらさらないと体言している。

「命を安売りするのは如何なモノかと思いますが、本願でしたら致し方ありません」

「別に死にたい訳では…、痛いのは嫌いですよ？スタイルがいいのは褒め言葉と思うんですが」

「では、眠る様に逝きなさい」

アイリの踊る指が方陣を描き、空陣から淡い光が漏れる。

フミアキは視線をクーエンフルダに移すも、少年はアイスクリームを食べるのに忙しい様だ。

どうしてこうなった。そう思いながら目を閉じるのであった。

4話 本でアイス（後書き）

読んで頂き有難う御座います。

まだ初心者で、客観的に自分の文を読めなかったりします。

漢字のルビがあつたら。や、場面の説明文が足りない。

や、文法の間違い等

気になる場所がありましたら、ご意見、ご指摘助かります。
よかったですらお願いします。

5話 旅で留守

「あー…、はあ」

その日は、珍しくクーエンフルダがアンニユイな様子になっていた。

いつも間隔を空けて遊びに来る彼は、感情表現が豊かで小動物的に愛くるしいのだが、

今日に限っては哀愁を体現するかの様な姿が、その容姿端麗さから見る者を危うげにする耽美さがあつた。

「全く、さつきから何ですか。溜息を付くのは私の専売ですよ、君は元気いっぱいが売りじゃないですか」

「売りってなんなのさ!？」

「もー、溜息が売れるなら品切れになるまで買って欲しいよ」

「君の溜息が切れたら、今度は私の溜息を横流ししますね」

「先生のがきた?! そんなの押し付けないでよ!」

「出資者の貴方と受領する私、二人は常に一心同体だったんです」

「何時の間に！？一つだったら僕の比重高いのはおかしいよね！」

「はははは、一心同体と言ったでしょう

ですから、クーの溜息を私に押し付けて下さい。

何、溜息は私の専売ですから楽勝ですよ？」

「あう…、先生が恥ずかしい事言ってる」

「女性に言うなら口説き文句ですが、

君相手に何言ってるんですか、思春期特有の悩みなら

同性の方が打ち明け易いでしょう。相談に乗りますよ」

「そんな深刻な悩みでもないし、思春期って…」

——実は。と、何故か顔を赤らめて説明を始めた。

どうやらそっちの話題よりも、溜息の理由を喋った方が楽だった様である。

「へえ、君の誕生会ですか」

「そうなんだ、毎年開いてくれるお父様には

申し訳ないんだけど、いろいろあって苦手って言うか気が重いんだ

「よね」

「まあ、分かる氣もしますよ」

「年が経つに連れて、そう言った催し物は氣恥しいですからね」

「お父様が盛大にしちゃうもんだから、余計に恥ずかしいよ」

「何、家族に愛されてる証拠じゃないですか
いい親御さんを持ちましたね」

「…先生、にやにやしながら言っただって説得力ないよ!!」

二人の遣り取りは平常運転に戻った様である。
もちろん、この後参上したアイリにお置きされたのは言うまでもない。

「これでよしと」

寢室にて荷造りをするフミアキ、その服装は旅装を思わせる。
いつももの持ち物を点検し、滅多に履かないブーツの踵を少し蹴る。

「どちらにお出掛けでしょうか」

「オオウ！？何度体験しても慣れない慣れにくい」

「慣れて下さい」

「自分が譲歩するつもりが微塵もない…とは…
まあいいです。私は暫く旅に出ます、家の事はよろしくお願いします。
後、ラミアさんが来ら追い返してあげて下さい」

最後のセリフはいい笑顔で決めて、何故か窓から出て行くフミア
キに

何時もと変わらず表情を変えないアイリは、ただ窓に向かって小さ
くお辞儀するのだった。

「ええー！先生居ないの?!」

何時もの様に遊びに来たクーエンフルダが驚きを露にする。
それもそうだ、彼が引つ張り出さなければ食料の買出しすらもせず
に仕事をする。
訪ねてきて留守だった記憶が、彼にはなかった。

「連絡は出したのですが、何処かで行き違ったようですね。申し訳
ありません」

「うっん、アイリが悪い訳じゃないし。
でも珍しいね、何処に行ったか知ってる？」

「行き先は仰らなかったので、コリーを出しています。
もう少ししたら連絡が来るかと思われます」

「アイリにも言っただけでなかったんだ、むう
なんたる、すっごい気になる！あ、旅行記なんか出す為の取材かな…
でも、そんな事言っただけでなかったしな」

一人唸って考え出す。フミアキに対する情報のカードが少ない事に、改めて思い知らされる。

「そっか…、僕、先生の事何にも知らないんだ」

クーエンフルダがフミアキを知ったのは、『不良勇者1巻』からであった。

偶々メイドの一人が置き忘れていった本を手に取り、何気なく捲ってから

大きな驚きと感動を覚えた。物語の書き方、登場人物の斬新さにも目を見張ったものである。

それまで本と言うモノは、王国史か、帝王学だったり、ソール信仰書など

所謂、お堅い本であり、それより易しい本となると、童子向けの御伽噺まで来てしまう。

大衆向けの娯楽書物は、ゴシップ等低俗なモノで占領されていた。（年齢制限がかかる物が大半を占めているのだが、クーエンフルダは存在すら知らない）

ましてや、フミアキが題材としたのは、『教導院』が検閲に最も力を入れる

『勇者』を扱う読み物であった。『勇者』と言う名は、『教導院』の看板にも等しく

イメージを崩す様な本は直ぐ様焚書された。

「……つぶ、くくくッ」

「如何なさいましたか」

「うん、先生を知った時の事を思い出してたんだけど、『教導院』に真っ向から喧嘩売る様な本を出した人は、どんな人だろうって思ってたな」

「あの本の様な勇者像を『教導院』が認めるハズも御座いません。自殺志願者でなければ、頭の緩い人間だろうと噂はありました」

「勇者ボルドーはカッコイイと思うのにな。人間味に溢れててさ、ふてぶてしくて、信念を絶対曲げない！『俺の剣戟がぶれないのは、ぶっ太い信念が通ってるからよ！』
「ってね！痺れるー！ー！もー、そうだよ！全然『教導院』の言う『勇者』像を
壊すモノでもなんでもないのにな」

「人間味、と言うのが問題ではないでしょうか。『教導院』は『勇者』を

神聖性を持つて祭り上げておりましたから。畢竟する所、拘束されたのも当然でしょう」

「今思い出しても腹立たしいね。頭堅すぎだよ、先生の書く新たな『勇者』像だったら

あんな凝り固まった『教導院』の布教する、『勇者伝説』よりも信者増えるよ！

それなのに、『教導院』ったら先生を処刑するとか言い出してたし」

「あの時は、助け出すのがもう少し遅ければ執行されていたでしょう。……残念です」

「アイリーン？」

「も、……申し訳ありません」

「全く、アイリは先生に厳しいんだから！でも、初めて牢獄に入った時

先生、遺書みたいなの認めてたよね」

「辞世の句などと仰っていました。何処の国の文字が分かりませんでした」

「諦めが良過ぎるのも、その頃から変わってないよね。その点だけは、改めて欲しいのにちつとも聞いてくれないし」

「アレは病気の類です。心配するだけ、周りを巻き込み傷付けましよう。」

私としては、深入りして頂きたく無く……」

「そう……だね。でも僕は……いや、私はアレが放って置けない。折れない信念を持ち、何者にも引かぬ『勇者ボルドー』の様なアノ男が。」

あの子の出来事でもそうだが、お前には苦労辛苦を掛けるな」

「勿体無きお言葉に染み至ります。全ては我が身の錆、どうかお心を痛めませぬよう」

「その後の経過は……、あまり芳しくない様だな。私こそ未熟の身を思い知らされた。」

確かに、方陣に頼り過ぎると言われても返し様がない」

「いえ、日常生活には何ら支障は御座いませぬ。御側を離れる事になりましたが、

私は常に御身の剣で在りましよう」

「ふふッ、この姿見では『連環の契』になっってしまうぞ？

アイリーンは大胆だな、くっくく」

「御戯れを…」

途中から引き締まった空気を吹き飛ばすように、クーエンフルダは背伸びして長椅子から飛び上がる。

「よし、この話しはここで終わりっと！アイリ、折角先生が留守なんだから

懲らしめる様な発見を見つけに、地下室の謎の魔窟を探検しに行こう！

先生が泣いて、もう死ぬのは諦めますから許して下さい。って言うくらいのをさ！」

「良い案で御座ます。お供仕ります、我が主」

5話 旅で留守（後書き）

思い出したかのように登場人物の身長の並び。

ラミア>フミアキ>アイリ>クー と、こんな感じです。

説明が足りない足らない至らない。

それでも読んで頂き有難う御座います。

6話 旅で遭遇（前書き）

……等々「表現の幅が狭いより広い方が良い」と付け加えた
R15の実行される話を書いてしまいました。この話を上げるのに
相当悩みましたがupする事に。賛否両論あると思います。
現代では法に抵触する行為ですので、不快に思うかもしれません。
それでも見ていただけるなら幸いです。

6話 旅で遭遇

ジリジリと太陽が照りつける。『教導院』に楯突き太陽信仰を一度敵に回した男には容赦なく、その力の限りの熱射が注がれていた。

慈悲は無く、夏と言う名の暴君が頭上に鎮座するこの世界。目深に被ったフードは、まるでソール神から隠れ逃れる様にも見え口は真一文字に閉じられ、良く見れば歯を食いしばっていた。

男は突然駆け出し、街道の側の林に駆け込む。

30過ぎの草臥れた男の顔には、焦燥がありありと浮かんでおり唐突な行動に不審が見え隠れする。

辺りを見回し警戒の色を強めたその顔色に汗がびっしりと浮かぶ、気温に寄る発汗作用だけでは有り得ない量である。

林の木々が、男の緊張に引っ張られる様にさざめく。

暫しの沈黙、そして何かを確認するかのように時を計る。

遂に、男は手を動かし行動を開始する。

「……………はぁー！ー！。生き返るー！…、…：うう、ぶるぶるとととと。歳かねえ、切れが悪いわ」

ドゴオオオツ！と、何処かで何かが地面に突っ込む音が聞こえた。
が、大開放中の為に気づかない。

「ふいー。やっぱり最初に水分補給し過ぎたか、…………ぶわつくつし
よい！
んー、何時もならそろそろ家に来る頃合だな。クーが噂でもしてそ
うだ」

かちやかちやとベルトを引き上げ鼻を吸る。フミアキは木々に若干の栄養素を
振り撒いて、晴れ晴れした表情を浮かべる。水筒を取り出し、旅に

置いては貴重な水で
手を洗うと、腰に付けた布で手を拭き汗を拭った。

「いやー、青空の下でのこの開放感。これぞ旅の醍醐味だ」

——うんうん。と、一人で納得する。また何処かで、ゴスウウ！と
何かが木にぶつかる音が聞こえる。

「はて、何やら音が…。まっ、気のせいかな。木の中だけに…」

ドヤ顔でお世話になった木に呟く。もしこの木に腕の一本でもあったのなら

気絶するまでぶん殴られる事間違いないだろう。

ガスガスガス！と、木を連打する音がまたまた聞こえるも、荷物を
背負い直して
街道に戻る。

「あー、久々の一人の時間はいい。アイリさんが来てから
快適に過ごせる様にはなったけど、元々独り身が長かったからな」

歩く。

「やっぱり部屋に籠ってるセイか身体が鈍ってる。王都から三日目。

明日辺りには、筋肉痛が来てくれるといいけど……こなかったら怖い
な」

ブーツを鳴らし歩く。

「そろそろ、クキの実の木が見えるか。アレって梅みたいに酸っぱ
いから

疲労回復の効果が期待出来そうなんだよな。街道に生えてるのは自
由に取っていいらしいけど、

そこはモラルに気を付けんと、お天道様が見てるってね。

そつ言やあっちの昔でも、街道を利用する旅人の為に果樹を植えた
って聞くし。

確か、戦時中は果樹を切り倒して、進行の邪魔をしたとかもあった
ような」

歩く。

「昔の人の効率に対する思いには執念を感じるね。一の事柄に二も
三も含ませる、

こう言うのを『一を似て十全と為す』だったか。いや、そもそも現
代社会の専門性が

細分化し過ぎているな、過去の効率とは方向が違う。言うならば『
百細を似て一と為す』か」

汗を拭い歩く。

「そうだな、例えば料理に使う出汁つゆ。煮物専用とか、鍋つゆ専用とか、

まあ色々ある。こう言うのを買い慣れてしまつと、みりんと醤油と砂糖、

これらで元を作ると言う発想が薄くなつてしまふ。一本で簡単に作れて便利なんだけれど

要は、応用が効かなくなるんだよな。酷い例だと、冷食でお弁当専用焼鮭なんてのもあつたな。

鮭の切り身買つて、お弁当枠で切ればいいって話しんだけど、時間短縮にはなるんだろうけど

…主婦の朝は戦争だつて言うし、うん、全国のお母さんは偉大です。感謝してお弁当は食べよう」

何かに向かつて言い訳しつつ歩く。

「おつと、三叉路に着いたつて事は…、ふむ、ここから真つ直ぐ北だったな

それでは、そろそろショートカットするかね。…誰も居ないよな」

足を止める。

「あー、本日は晴天也、本日は晴天也。…ん、んつ、んああー、此方より、彼方へ、続くぞ連なれ重なり往く、阿、吽、走者の蝉の聲外天、正天、運龍昇らば快天の、魂に聞こえし奥山彦」

ブーツの踵を鳴らすと地面に方陣が現れる。地陣より微量の光が立つ。

「――『韋駄天ブーツ』発動」

一歩力強く踏み出すと、瞬間に身体が加速する。頭を低くして抵抗を抑える。
もう周りの景色は凄まじい速さで過ぎ去って行く。

「この、加速、には、やはり、慣れ、ない。誰だ、こん、なの、作った、のは」

歯を食いしばり足を動かし空気を切る。言う為れば、急な下り坂を走り抜く感覚。
後半は意味もない愚痴である。

「はあ…、帰った、ら、改良、せねば」

『光具』と言われる物がある、方陣の効果を限定的ながらも物の中に籠める技法。
方陣の短所は、その発動までに掛かる手順の煩雑さが一番に挙げられる。

仮に戦闘中などは、一々陣を書き、紋言を唱えてる暇はない。故に、予め出来上がった
方陣を物に簞めた光具は『形ある紋言』のみを持って発動されるので、年若い者に好まれる。

大した力も持たないフミアキに取って、補助具である『光具』は、実にお誂え向きだった。

作成するにしても、簞める際に力の強弱は関係なく、如何に正確に方陣図を刻めるか、如何に丁寧のべつ幕なしに力を簞められるか、如何に方陣図を多く盛り込めるか、如何に自身の想いを乗せられるか、が効果に強く影響を及ぼす。そうフミアキは思っている。

このブーツ、『韋駄天ブーツ』はフミアキの自作の光具で、旅の共には必ず履いて行く。

効果は、歩いた歩数を靴に貯める事で、発動後爆発的な速さを得る物である。

体力が貧弱で足の遅いフミアキにとって、『韋駄天ブーツ』を使って漸くこの世界の一般人の旅程

と並べる。一般人は一般人でも女性の方で、と言う事実にはフミアキの心は深く決られたそう。

目紛るしい景色の変化は、やがて木々の緑を映すだけになっていった。

目的地が近づいてる事に、安堵の溜息を付きそうになるも、その口は加速に抵抗する様に

固く閉じられている。早く目的地に到着して身体を休ませたい、と安堵に緩む意識を立て直す。

この高速走行中は、拳動がその速度に寄って著しい制限を受ける。そう、

「ん？な、黒い……」

車は、

「え？！ちょ、とま……」

急には、

「うおおおおおおおお……」

止まらない、のだ。

ゴツチン、と言う音と共にフミアキは意識を飛ばす。そしてフミアキに突撃された
黒い塊が、ドオオオンと音と共に倒れる。三つの息遣いが暫し森に溶けるも
直ぐ様、黒い塊から唸り声が漏れる。

「グルウウウツ」

「……………っ!？」

「……………」

唸る声、息を飲む声、フミアキは今だ気絶を続ける。そして、その場面におかわりが入る。

「ふっざけんなああああ!! あんのお、う” あかがああああああああああ!!」

「もう許さない、もう許さない、もう許さない! あんた! 邪魔よ!」

言い終わるよりも先に女の剣が一閃すると、黒い塊が無常にも切り刻まれる。

「熊如きが！あたしの邪魔すんなっ！！いい？！あたしはひっじょーに苛立っている！」

あの馬鹿が、突然馬鹿みたいな速さで走り始めて……！このあたしが追いつけない、これ以上離されないようにするのに手一杯になるなんて……！」

燃える様なカーマインのショートを震わせ、アンティックゴルドの瞳は怒りを隠す事なく露にしている。

「……あの」

「ったつく！熊如きのセイで、あの馬鹿見失っちゃったでしょ！腹立たい、苛立たいもう、この辺って四角頭の懐よね。ならいいわ。行き先は絞られる」

「あの……！」

「あん？！うつさいな！あたしは忙しいのよ！」

「い、いめんなさい」

カーマインの少女は、か細い声を一喝する。ん？と首を傾げ、漸くその場に居た小さな少年に気付く。

「あんた誰？なんでその馬鹿は寝てんのよ？」

時刻は夜、少女は石造りの家を前に立っていた。

背にはフミアキを負って、小さな少年に付き添われてここまで来た。ドアを開ける前に、乱暴な音と共にドアが開かれる。

150にも満たない小柄な身体、けれど立派な髭と腹が壮年の貫禄を出している。

髭の男は、大きな斧を背中に負いその覇気を溢れさせていた。

「お、お前！？何処に行つてやがった！心配したぞ！！」

「父ちゃん、ただいま！」

覇気が霧散する。親子は二人で抱き合い、無事の再開を喜ぶ。

「お前が戻らねえって言うんで、今から出る所だったんだが…
よかった、本当によかったぞ」

「ごめんよ父ちゃん、森で熊に見つかっちゃって…でも、この人が
助けてくれたんだ！」

放って置かれた女に、父親が漸く気付く。少女を見ると何とも複雑な表情を出し、
息子を横に置き向き直る。

「ふん…、息子が世話になったようだの。一応感謝するぞ、丸頭」

「別に？子供の世話くらい出来ないもんかしらね。
槌を振るうばっかしてんじゃないわよ、四角頭」

横から、父ちゃん！と、諫める声が聞こえたが二人は睨み合う。

「……、まあいい。随分懐かしい顔も居る事だ、息子の礼もある。
中に入れ」

質素な室内に通され、いい加減重たくなったフミアキを長椅子に投げる。

そして、少女は勧められたテーブルの椅子に着き肩を解す。

「母ちゃん、グリスが戻った！客もいるから茶あ出してくれ！ほれ、お前も母ちゃんに顔見せて来い、ったく」

「うん、お姉ちゃん、またね！」

「あー、改めて礼を言うぞ。グリスを助けてくれて感謝する。儂の名はグリゴス、巖窟族であ光具鍛冶を主にやっとなる」

「見れば分かるけど徒人族。で、あたしはコリー。あの子を助けたのは成り行きだったけどね」

——言っても危ない所を防いだのは、そっちの男らしいけど。と、続けその時の説明をする。

「ぐっはっはっは！フミアキらしい、全くこいつは変わらんない！」

大きな髭を揺らし破顔する。コリーは目を剥く、気難しいと言う

言葉の代名詞が笑うのだ。

「……こいつ、何なの？知り合いみたいだけど」

「なんだ、嬢ちゃんはフミアキの連れ合いじゃねえのかい」

「誰が、偶々、偶然、気紛れで助けただけなんだから」

「こいつあな、2年程前までここに置いてやった縁がある。

言ってしまやー、ただ、それだけだ……。しかし、見ねえ間に随分と痩せやがったな」

——飯くってんか。と、フミアキを見ながら話すグリゴスの顔は穏やかだった。

それだけで、グリゴスとフミアキの関係が透けて見えてきそうだった。

「こいつの用は大体予想がつく。だが嬢ちゃんよ、お前えなんだって森に居た？」

見た所、仕入れの商人って風には思えねえな」

「……」

「……」

あれ程豪気に笑っていた顔も鳴りを潜める。厳い髭の男と紅い髪
の少女が睨み合う。

グリゴスが少々感心する。年若い少女が、鋭い眼光に気負いもせず
に向き合ってる。

何時まで経っても埒が明かない、もう仕舞だ。と言わんかの様に、
この場を流す事にした。

それにこの少女、一応息子の恩人である事を思い出したようだ。

「まあ、いい。何の目的があるか知らんが、兎や角言つめえよ。だ
がな、

家族に手を出すな、それだけは言っておくぞ、丸頭」

「……誰もそんな事しやしないわよ、この四角頭」

こうして、フミアキは気絶したまま夜が更けていった。

6話 旅で遭遇（後書き）

ご意見、ご指摘ありましたらお願いします。

漸くファンタジーっぽい種族が出てきました。

どう見てもドワーフっぽいですが、本当にありがとうございます。

7話 旅で団欒（前書き）

上中下の3話構成で考えてたのに収まりそうにない…。
ぐだぐだですが、それでも宜しければどうぞお読みください。

7話 旅で団欒

「ぐっ！……はぁ……はぁ、あ、あつたま痛っ」

フミアキが目を覚めたのは翌日、頭の中を鈍痛が走る事で意識が戻る。
ベットに寝かされている事に気付き、ゆっくりと頭を上げて部屋を見渡す。

「……やれやれ、どう言った魔法かね。なんとも懐かしい」

この場所は、2年前までフミアキが使わせて貰っていた部屋だった。

「移動中、熊？事故って…気が付いたらグリゴスさん家って。何がどうしてこうなった」

起き抜けの頭に鈍痛を抑えて、意識が途絶える前を思い返す。
記憶を掘り起こす事と、鈍痛がせめぎ合って、暫し思考停止に陥る。

「あ、兄ちゃん！起きたんだね！」

そこへ、何とも高い子供の声が元氣よく張られて、フミアキが改めて悶える。

「お、おはよう…グリス君？ちょっと声抑えて貰えますかね」

「あ、ごめんね。どう起き上がれそう…？」

つい口を突いて出てしまった言葉に後悔する。子供に取って声が高い事も

大きく声が出てしまうのも当たり前前の事であり、まして自分を心配しての行動で尚更である。

「すいません。少し頭が痛くて、ですね。もう大丈夫なので気にしないで下さい」

「朝ご飯だけど、どうする？部屋まで持ってこようか？」

「いえ、それには及びません。グリゴスさんにも挨拶しないといけませんから」

やんわりとグリスの提案を断り、登る痛みを表情筋に力を入れて黙らせる。

心配そうにこちらを見てくるも、子供に気を使わせない様に何時も通りを装う。

「おう、やっと起きたか、とつとと飯にするぞ」

「お久しぶりです。グリゴスさん、それに、パルさん。お二人とも変わりないようで」

「あらあら、フミアキ君は相変わらずねえ。もう、身体の方は大丈夫なの？」

何時も思っただけど、無理しちゃ駄目よ。フミアキ君は何にも言わないもんだから

おばさん心配になっちゃうのよ。どう、向こうでいい人でも見つかったかしらあ。

仕事の方は順調みたいなんだけど、偶にはこうやって顔出してくれると嬉しいわあ

そうそう、前もって言うてくれるとフミアキ君の好きな物用意するだけだね

突然だったもので、あんまり大した用意も出来なくてごめんねえ
ああ、でも身体に触るから、朝は軽くしておいた方がいいかしらあ」

「だあ！母ちゃんはちつとは黙つとれ！話が進まんぞ、お前も突っ立つとらんで

とつとと座れ。母ちゃんの長話が止まんからな」

椅子を引いて食卓に着く。この家の住人に合わせて作つてある為
にフミアキにとつては若干低めであるが、昔使っていた食卓台が置
かれています。ほろりと感謝の念が湧いてくる。その食卓台は、よく見ると二人分
あった。

「……」

「……」

期せずして隣に座る女性と目が合う。カーマインの髪をショート
に散らしてアンティックゴールドの瞳と勝気な眉がフミアキを覗いている。そ
のまま見つめ合ってしまうも不似合いな瞳の若い女性に留められる。歳は10代後半だろうか、
強気な眉がピンと二本乗る往古の黄金色の瞳は、アンバランスな印象をフミアキに与えた。
しかし、古色の瞳に若い生命に溢れた眉、新旧が渾然一体に作られた
美しい造形だったから。

「……なによ」

「あ、ああ、いえいえ、なんでもありません。おはようございます。
初めまして、で、よろしいですかね、フミアキと申します」

「…」

「かあー！フミアキ、何時もいつてんだろっが！その鯨張った言い方はやめろ！

飯が不味くなる！嬢ちゃんも嬢ちゃんだ、飯時にそんな顔してんな。いくら息子の恩人だろうが、あんまし過ぎるとたたつき出すぞ！」

家主から、バックアタックと後方支援が同時に飛んでくる。性格が大雑把な為か
面倒は個別に対処するより、引つ括めて両断するのがグリゴスの持ち味だった。

「ふんっ、コリーよ」

「はい？」

「…だから、あたしの名前。コリーよ」

ぶっきらぼうに述べて、視線を外す。釣られてフミアキも視線を食卓に戻す。

それを合図に、グリゴス家の遅めの朝食がようやく始まった。

食事が終わり揃って緑茶を啜る。巖窟族の育てる茶葉は、巖窟族そのものと言わしめる程渋い事で有名であり、岩窟族以外では滅多に口にされないが、物好きが愛飲する事でも有名だったりもする。

因みにこの巖茶は、子供には渋すぎる為飲ませるのは禁止されていたりする。

禁止されると手を出すのが子供の常だが、余りに苦く渋いので子供は誰も嫌う、

まるで薬だと顔を顰める。ので、グリスは朝食が終わればすぐ外に出ていった。

「フミアキ、お前どう言っ了見で戻ってきた」

「あんた」

「わぁーってる。お前、叶えたい夢がある。そう言っ出てったな
お前は、光具造りの才がある、こりゃ、儂ら巖窟族でも届かん所にあるやもしれん。

ここで光具造りを修得し、鍛え上げりゃあの話だな。

巖窟族の光具ぬちだったら、喉から手が出るくらいのモンだ
それを捨てて、お前は行ったな、叶えたい夢があるってよあ」

「……」

「そんだけの気概を持って出て行った。ならよ、なんで高々2年で
戻って来た。

もうお前の夢は叶っちゃったんか？もういいのか？」

「グリゴスさん、私の造る光具は『外法』です。今まで巖窟族の方
々が

造り積み重ねた技法に泥を塗ってしまいます。貴方達の技に尊敬す
る、

だから私は光具造りを本職にする事は出来ません。この技は埋めて
置くのが

いいんですよ。一般常識がある者なら激怒するでしょうし」

「はあ……、変わんねえなフミアキよお。高が異色の技術だ、10
0年もすりゃ

お前の遣り方が世の常になるかもしれんぞ」

「それなら私がせずとも、時代が技術を求めましよう。
その時が来たのなら、私が心の中で先駆したとほそく笑む、それだ
けでいいです。

それに、私にはまだまだやりたい事が一杯ありますから、

『槌を取り替えるな』とは岩窟族の先達の言葉ですよ。
私は筆を握るだけで手一杯ですよ」

「あー言やこー言う、お前って奴は本当に七面倒くせえ。
わーったから、要件を言え。態々訪ねてきたって事は、なんかあんだろ」

「いやですね、グリゴスさんの顔を見に来だけですよ？
それにパルさんの美味しいご飯とお茶を飲みに来るだけでも価値はあります！」

先程までの巖茶の様な空気が一気に薄くなる。代わりにグリゴスの顔が渋くなり
真っ赤になって沸騰し始めた。パルが「あらら、おばさんからかつ
ちや、ダメよお」と
嬉しそうに言ってる事にも原因があるのかもしれない。

「フーミーアーキーー！！そこに首置け！！巫山戯やがつて、
今日と言つ今日は許さねえからな！！いや、今日こそ許さねえぞ！！」

「わーわー！！冗談！！冗談ですって！！グリゴスさん落ち着いて落ち着いて！！」

黙れ！逃げるな！首を置いてけ！え？これなんて置いてけ堀の妖

怪？

などと追い掛け追い逃げの二人劇場を始めてしまった。

「……ねえ、これ、止めなくていいの？」

「うふふ、懐かしいわね。フミアキ君が居た頃は毎日がこんなもんですよ」

最近のご無沙汰だったし、あのひとつたらあんなに喜んじゃってえ」

これに驚いているのはコリーただ一人で、二人はとても自然に逃走劇を繰り

パルは笑顔で湯呑を片付けている。慣れたモノであった。

「で、命の恩人の誕生会があるから、御山に入る許可と鍛冶場を貸してくれってか」

「誠に持って仰る通りに御座います。何卒グレゴス様の御力を持って二つの御許可を采配して頂きたく存知上げます」

ギン！と眼光が、まだ足りんのか？と問い掛けてくる。

もう既に、フミアキの身体はぼろぼろで倒れる寸前だが、グレゴスの前

正座して会話している。それでもフミアキを気絶させずにお仕置きするには

技術を要するので骨が折れるが、実に巧みな仕置き具合であろう。

「……いいだろう。だがよ、お前一人で御山に行ったらどうなるか分からねえ

嬢ちゃん、こいつに付いてってくれんか」

「なんであたしがっ」

「フミアキは体力がねえ。 그리스 と喧嘩しても負けんだろう
そんなんが御山に入っても、火見るよりあきらかだ」

「あたしが付いてく意味が分からないわよ」

「そうですよグリゴスさん。 コリーさんも用事があってここに来た
んでしょっし」

「なんなら護衛の報酬も付けてやる、儂が造った光具の3級それに、『準範士』も乗つけてやるぜ」

「はっ?!『準範士』?!それって上から二つ目……!」

「これでも日々成長してますよ。昔の私としないで頂きたい」

「正確にや、上から三つ目だがな。いい加減『準』はとっちまいたいがよ」

「普通に言ったら、『範士』が最高位でしょ…ウソ…本当に?光具鍛冶に疎い奴でも、『範士』が類い稀な功績を残す様な存在でてくらい知ってるわよ……」

「魑魅魍魎の巢食う王都に2年も生き延びたのは伊達ではないのですよー」

「どうだ悪かねえだろ。儂の見立てなら、お前さんは『速さ』中でも『剣速』で押す戦法を使うと見た。だが、そう言う奴等は得てして防御が軽くなる。

そりゃそうだ、重いモン身に付けてりゃ『速さ』が死んじまう」

「……合ってるわよ。3級の光具でも『準範士』が乗れば、逆に使い易いわね」

「化け物共をちぎっては投げちぎっては投げ、その中で遂に私は覚醒をし……」

「嬢ちゃんも知ってんだろ？が、巖窟族の光具『防主』方陣はそうそう貫けるもんじゃねえ。お前さん強くなるぜ」

「好条件ね。高々護衛で、しかも丸頭を守る為になんでそこまでやるのかしら」

「そして化け物に囚われた謎の美女を救いだ…あ、パルさんお茶ありがとうございます」

「はんつ、儂らの神聖な御山を、丸頭の血で汚したくないだけだ。なんだ嬢ちゃん、忙しくて“お使い”もできねえのかよ？」

「へえ、言ってくれるわね。あの“ケチ”で“頑固”で有名な四角頭が随分太っ腹な話をするから、本当に報酬が出るか心配になっちゃってね。」

ああ、見れば大した太っ腹よね」

「ふう…、パルさん今年の巖茶はいい出来ですね。この深い渋みうん、作り手の苦勞が立派に報われていますよ」

「…」

「…」

「ええ、全くそうですね。いやいや、そんな。本当の事ですよ。」

パルさんはまだ全然いけますって、グリゴスさんが居なければ私が」

「…」

「…」

「好感触、また、そんな事言うと私も本気を見せてしまいますよ。はははっ、ついにゴートさん家のゴーン君も春が来ましたか。羨ましいですね」

「…」

「…」

「いえいえ、私なんて未だに男やもめですよ。いや本当。まあ独り身が長かった
ですからね。ああ、そうですね、ガーガリ君がね。それは困った…
ぶわっくしょ」

「うるせえ（さい）！！！！」

「おおう、何ですか二人して。て、もう話し合いは終わったんですか？」

「やかましいいいい！お前が御山に入りたいいつつーから
儂が骨折ってやってるに、さつきからぺらぺら脳みそのねえ
話を喋りくさってからによお！」

「こっちは大事な話をしてんのよ！あんた、本当にやる気あんの？
！」

「あのですね、ガーガリ君も今難しい年頃なんですよ？
あの位の年の子は、手を出すのも、放っておくのも微妙な感じなんで
加減がしづらいんです。どうしたモノでしょうかね」

「ガンスん所の糞倅なんぞどうでもいい！いいか！とつと嬢ちゃん連れて
御山に行つてこい！これは儂が決めた！もう覆らん！これで仕舞だ！
母ちゃん、儂が出る！ガンスん所のハナタレめが、性根叩き直して
やる！」

「いつてらっしゃい」と、パルに送られて怒つて出ていってしまった。

呆然と見送るのは二人の男女、コリーが「はあ……」と諦めた様に息を漏らした。

「しょうがないわね、山の護衛は引き受けるわ。で、その山つて何処の？

とつとと行くわよ。あーもー頭痛い」

「え？え？」

フミアキを引き摺りながらコリーが家を後にする。そんな三者三様を

パルは笑顔で見送るのであった。

7話 旅で団樂（後書き）

用語解説？

バックアタック 後方から強襲される。これをやられると高い確率で後衛があぼんする。

光具ぬち 光具造りの職人の事。

槌^{つち}を取り替えるな 巖窟族では自身の槌を大切にします。

真新し槌は新人。古い槌は熟練工。

槌を取替取替してるぬちは信用されませ

ん。

あー言やこー言う あー言やこー言う。フミアキみたいな人。

光具3級 数字が若ければ若い程、なんかよくわからないけどすごくなります。

準範士 ぬちの職位。『』>範士^{はんし}>準範士^{きょうし}>教士^{れんし}>錬士^{れんし}>弟子<見習い

錬士から一人前。教士から弟子をとれます。

大抵のぬちは、教士までです。準範士は巖窟族でも20人未満。

範士に至っては、2人です。

化け物と美女 フミアキの妄想。

ゴーン君 （岩窟族で）イケメン君、幼馴染のペートちゃんと

散々じれじれした挙句、喧嘩↓仲直り↓春到来↓リア充

ちね。

ガーガリ君 ペートちゃんに横恋慕するも、イケメンに撃破される。

根は悪い子ではないが、直情的過ぎる傾向がある。

振られたショックで絶賛^{ワル}悪中。

グリゴスさんの鉄拳が飛ぶ。

暇を見て、各話のあとがきにて用語解説？を付け足していきたいです。

ご意見ご感想お待ちしております。

8話 旅で山

「本当にこつちでいいの？」

しつかりと踏み固められた土の上を歩く二人。

鉾山に続く幅広の道は、何十年も使い込まれ力チ力チになっている。

「ええ、後は道なりの一本ですから迷う事はないです」

「何これ？こんなんで護衛なんて意味あったのかしら」

「そもそも鉾山の奥に行く訳ではないんですよ。」

グリゴスさんもアレで心配性だったりするんです」

はあ…と、コリーが呆れた溜息を着く。鉾山に続く道は穏やかであり、

何の危険の予兆も感じ受けない。まだフミアキに追いついた時の森の方が、

緊張感を持てたかもしれない。

今向かっている鉾山は、坑道が伸びきっていて全盛期の面影が見受けられない。

そんな若干寂れた鉾山だが、その分道は踏み固められ歩き易く

長年道に染み込んだ人の臭いから、獣も避けて通る為に安全と言えた。

「……あんたって、光具職人だったの？しかも準範士に認められる程の」

「いいえ、確かに趣味で少々光具を造りますが、私はぬちではありません」

空には神が鎮座し、今日もその熱を降り注いでいる。

「すごい褒め様だったじゃない。あたしは“偏窟族”が自分の所以外の種族を褒めた事なんて初めて見たわよ」

「コリーさん、余りグレゴスさん達の事を「四角頭」だの「偏窟族」など呼ばないで下さい。彼らは不器用ですが、気持ちが真っ直ぐない人達です」

ピーチチツと野鳥が囀る。森は新緑の季節に伸ばした枝葉を方々に、
光合成を勤しむ。

「はん！あいつらだつて言ってるわよ「丸頭」「凡族^{ほんぞく}」ってね
まったく舐めんじやないわよ」

「はははっ、凡俗と掛けているんですね。いい得て妙とはこの事です
か」

バサササと名も知らぬ野鳥が飛び立つた。フミアキより背の低い
コリーは
フミアキを睨^ねめ上げる形になる。その剣呑な空気は周囲を巻き込み
野鳥は避難を余儀なくされた。

「あんた……あたしに喧嘩売ってるの？」

「コリーさん、笑って受け流せばいいんですよ。“大人”はそうや
って世を渡るんです」

それはまるで“子供”だと言ってる様に聞こえ、瞬間コリーの殺
気が膨れ上がる。

何時の間にか二人の足は止まり、一方は睨み一方は見て視線を交差
させる。

「巫山戯るな！巫山戯るな！巫山戯るなっ！あたしが女だからって
舐めるのもいい加減にしまっ！」

「喧嘩も売っていませんし、舐めてもいませんよ。
もう少し肩の力を抜いた方が、心持ちが楽になります」

——ですから、と続けた言葉は、彼女の左手に握られたモノに寄
って遮られる。

「……」

「……はあ」

剣を突きつけられてるにも関わらず、顔色一つ変えずに溜息をつ
く。

普段キツイ突っ込みをするグリゴス、アイリは振るう力を理解して
いる。

だがこの少女は、感情に振り回されている。年若い証拠でもあり
フミアキは頭を抱える。

（説教なんて柄じゃないんだけど、そもそも好き勝手生きてる自覚
はあるし

年だけくっている奴に諭されたくはないよなー）

未だにこちらを睨みつける古色の瞳が、少し不安げに揺れた。

恐らく出した手を漸く理解し、その収めどころに困っているのだろ
う。

「……頭は冷えましたか？では行きましょう、まだ目的地にも着い
てないので」

フミアキは面倒事を、後回しにしたようだった。

空気が重い、空は晴れ渡り周りは山々に囲まれ王都の様な騒がし
さは微塵もない
実に牧歌的で心がゆったりとしてくるハズ、にも関わらず二人は無
言のまま歩く。

鉱山の入口を通り過ぎ、山に沿って歩き始めるフミアキに声がか
かった。

「…鉱山に用があつたんじゃないの」

「ああ、ここは坑道が伸びきっていて余程奥に行かないとめぼしい物は採れないんですよ。これから向かうのは剥き出しになつて崖ですね」

暫く歩くと、切り立った山肌が見えてきた。

「ここは意外といい物が見つかるんですよ。私の秘密の場所なんです」

「……」

コリーが見上げる崖には、とても彼が言う様な「いい物」があるとも

思えない、普通の岩が剥き出しになっているだけであつた。

「さて、ちよつと上まで行つてきますね」

——『韋駄天ブーツ』発動。怪訝な顔をしてるコリーを余所に、『形ある紋言』を唱えると“崖を垂直に駆け上がった”行つた。

「は？はああああ？！」

下から素っ頓狂な声上がるも、凄まじい速さで駆けるフミアキには

聞こえなかった。中腹に出っ張りがあり、手を掛けて乗り上げる。

「ふう、よかった。まだ誰にも触られてないな、
確かこの辺に……あつたあつた、よつと、む、こっちに繋がってる
か」

2年前までこう言う穴場を狙って採掘していたフミアキは、
目的の物をコツコツ掘り始める。鉱山に潜るより、外回りでちまちま
採掘しはじめると意外に鉱物が見付かるのだ。
もちろん量は多くないのだけれど、趣味に使うだけなので十分だっ
た。

小一時間程採掘に励み手の平大の塊二つに、それよりもずっと小
さな塊を
懷に仕舞い、昔設置したロープを手に取り帰る支度をする。

「これでこの場所はほぼ採り尽くしたし、残りは三箇所くらいしか
残ってないな。

まあ、そんなに来ないし別にいいか……怖くない怖くない怖くない」

「ヒイイイ、高い、怖い、揺れるうううう！登るのは一瞬だけど

降りるのは本当に怖い！！」

ロープに体重を預けるもたった一本しかない。翼のない生き物にとつて

高所は恐怖以外の何者でもないし、気を紛らわす為に意味の無い事でも口にする。

「うおお、風が風が！この悪戯好きの風さんめ！あ、ごめんなさい謝りますから揺らさないでえええ！などと男は訳の分からない事を供述しており、警察では余罪も含めて調査していくとの事です。

以上、現場の崖より中継でした。えー、それではスタジオに戻ります——現場のフミアキさんありがとう。では次週の週間天気予報に移ります」

本当に全く意味がない、意外に大丈夫なのかもしれない。

「なんてぷぷぷつ、ああこんにちわ。散歩ですか？

天気がいいし君達は自由に飛べて羨ましいですね。私も若い頃は空に憧れたものですよ、主に仕事に疲れた時なんかは……。

えっ、あの、ちょっと、何を。あ、ダメです！ロープつついちゃダメエエエ！」

騒がしくしたからだろうか、何時の間にか大きな鳥がフミアキの周りを飛び

しまいにはロープをつつき始めた。仲間の鳥だろうか、つついてる

鳥と一緒に

ロープを啄みフミアキの顔が青くなる。

「え？え？更におかわりですか……。この旅が終わったら、私は可愛いお嫁さんを探すんです。それまで私は死ねない！」

鳥が寄って来た時点で降りる速度を早める。も、無情に鳥達が喝采を上げて最後のひと付きをする。

「オワタ」

頭上で人生を諦めたフミアキに対して、焦ったのはコリーであった。

大きな鳥が集まって来た時点で、コリーも嫌な予感をヒシヒシと感じていた。

「何やってんのよあの馬鹿は。……まさか落ちてくるって事はない

わよね

自分で口にしながら予感を否定するも、フミアキが落下する様を見て手が動く。

「ああもう！えーっと…、紋言無理。陣だけでなんとか……?!」

高速で方陣を形成し、空陣を三つ四つと縦に重ねていく。五つ目を創り始めたその時に、ドーン！とフミアキが背中から方陣を突き抜けて落下してきた。辺りに土煙が立ち上る。

「い、生きてる…の…?」

急いで近寄って生存を確認する。奇跡的にひどい怪我がないようでほっと息を吐き出すコリー。

「あいつが言った事がしみじみと分かるわ。森の件もそうだったけど一人で出すと本当にどうなるか分からないわね、これは」

しょうがないと言いたげに溜息をついてフミアキを抱える。

「なんだか馬鹿らしくなっちゃた。あーもーこいつ相手に緊張して

たなんて…

あたしの恥だわ。……って、何よこれ！なんでこんなに軽いのよ！
いつ！？」

若干女性としてのプライドを傷付けられながら、フミアキを背負
いなおし

来た道を引き返すコリーだった。

8話 旅で山（後書き）

うーん、キャラの性格が安定しませんね。

書き直すかもしれませんが、漸く書けたので取り敢えず投下。

ご意見、ご指摘ありましたお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9638x/>

異世界で物書き

2011年11月15日08時00分発行